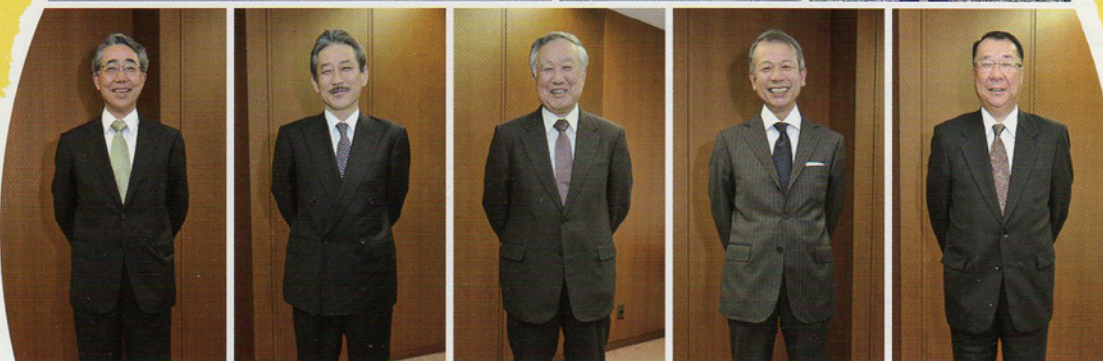




Contents

P.2 《特集》

決意も新たに、新中期経営計画「MGC Will2014」始動
構造改革により収益力を強化。未来を担う事業創出へ

■酒井社長メッセージ

■織作常務に聞く「MGC Will2014」の針路

■カンパニー・ビジョン 各プレジデントが決意の言葉を語る

[NC] 山崎プレジデント [AC] 酒井プレジデント

[KC] 倉井プレジデント [SC] 宮内プレジデント

P.10 未来事業創出プロジェクトグループ

P.12 世界のMGC海外見聞録

「微笑みの国」インドネシアでの駐在生活

P.13 MGC GROUP NEWS FILE

P.16 写真と川柳でつづるペット自慢

P.18 ボランティア紹介など

P.19 忙中閑あり／モニターアンケート紹介

P.20 MGC GROUP PHOTOスケッチ

P.22 震災から一年 被災地の希望を訪ねて

P.24 MGC日本環境100景／ボランティア紹介

震災から1年●特別企画●「被災地の希望を訪ねて」……MGC広報IR部が行く

昨年3月11日の東日本大震災は、MGCグループ内にもさまざまな被害をもたらしました。敷地の各所が地盤沈下した福島県西白川郡のエレクトロテクノ社。配管のずれや亀裂、断裂が300力以上発生したMGC鹿島工場など。東京周辺でも帰宅困難者が続出し、だれもが他人事とは思えない経験をしました。その後、MGC広報IR部が、被災した東北地方で学校教材が不足していると聞き、「MGCふしぎ科学実験キット ほかほかカイロを作ろう!」の寄贈を申し出たのが昨年夏のこと。東北3県から10校の依頼があり、2872個のキットをご送付したところ、各校からお礼の電話やFAXが届きました。中でも、宮城県気仙沼市立小原木（こはらぎ）中学校・横山秀敏校長からのFAXには、全校生徒39名が無事だったことや実験キットを使っただ子どもたちの様子が丁寧に書かれていました。今回、小原木中学校にお邪魔してお話を伺い、被災地の現状も含めた「今」をご紹介したいと、「W A!」では特別企画を立てました。実験キットがつないだ東北・気仙沼の縁、そして被災地の希望を広報IR部部長・北川と梶が訪ねてきました。

第1部●気仙沼市立小原木中学校にて

冷たい雨の降る3月5日、「W A!」編集部は東京駅を出発。東北新幹線に揺られて2時間あまり、一ノ関駅は一面の雪景色でした。そこから大船渡線に乗り換え、約1時間で気仙沼駅へ。さらにレンタカーで15分ほど、目的地である小原木中学校に着きました。北川が横山校長にインタビューしました。

「3・11大きな津波が来る!」

北川 皆さんご無事とお聞きしましたが、3月11日はどんな様子でしたか？

横山 卒業式を翌日に控えて、3年生を午前中に下校させ、1・2年生と式場の飾り付けをしていた頃に地震が起きました。その後、波が沖に引いて行くのを見て、「これは大きな津波が来る!」と感じ、小雪が舞う中、校庭の真ん中にみんなを集め

▲横山校長（右）が語る震災当時の様子を、神妙な面持ちで聞く北川（中央）と梶（左）



ました。3時20分くらいでしょうか、14、15mの津波が押し寄せてきました。学校は海拔70mと高台にあるの

で、直接津波の被害は受けませんでした。当時生徒32人中12名、職員13名中3名の家が全壊ですから、被害は甚大です。翌日、生徒や家族、教職員も皆無事だとわかりましたが、おばあさんを津波にさらわれたという3年生の女の子がいます。

北川 校庭には仮設住宅が立っていますね。

横山 被災当日から、体育館が避難所になり、教職員は多い時で300名もの避難者の対応にあたり、生徒には避難所でのボランティア活動を指示しました。この地域の特徴かもしれないませんが、自治会中心で炊き出しをしたり、校舎周辺のそうじなどを行ったり。「自分たちでなんとかしなきゃ!」という人が多かったですね。夏には仮設住宅ができましたが、地域の方々との連携を図って、学校行事に招待したり、部活動の指導をお願いしたり、避難訓練を合同で行うなど今も生徒との交流が続いています。

「身近な化学変化に皆驚く!」

北川 今回、初めて気仙沼に伺って、1年経ってもこの被害状況に言葉が出ませんでした。

横山 起きてしまったことを嘆いても、仕方のないことです。大変だからこそ、できることがあると常に子どもたちに伝えています。御社から実験キットの声をかけていただいた時も、生徒たちがきくと喜ぶと思って申し込みました。

北川 実験キットは、2007年から教育委員会を通して学校に配布していますが、震災後、東北地方の学



▲「実験、おもしろかった!」「カイロが食塩水とおがくすと鉄粉でできるなんて知らなかった!」と、生徒から実験キットの感想が次々と返ってきた

校を中心に寄贈しました。

横山 当時、2年生の理科の授業で使いましたが、身近にあるカイロがなぜ温くなるのか?と化学変化を体験できて子どもたちは楽しかったようです。本当にありがとうございます。実は、全校生徒分として40個ほどキットを送っていたいたのですが、余った分は、来年度の授業で使おうと思っています。

「こんな時だから、やっぺし!」

北川 震災後、困っていることがいろいろあると思いますが、

横山 親御さんたちの仕事がなくなくなり、全校生徒の46・2%が生活保護を受けることになりました。お金のない状態で、どうやって生活するのか。学校としても、親御さんたちの痛みはひしひしと感じて。教材は手づくりで先生たちと相談していたところ、ある出版社から無償提供してもらったことに。御社の実験キットも含めて、こういった多くの厚意

を忘れずに、子どもたちの様子も随時お知らせしようと、学校のホームページを立ち上げました。

北川 弁論大会で優秀賞、絵画展の特別賞など、生徒さんのご活躍は素晴らしいですね。

横山 それだけこの震災は、特異な経験でした。子どもたちは気持ちをそのままぶつけているので、作文や絵にも力があるんですね。今まで当たり前だったことが、幸せなことだったと気づけた分、大きく成長したと思います。「こんな時だから、やっぺし!」とよく子どもたちと話しているんです。

北川 この出会いを心に留めて、我々もできることを続けていきたいと思っています。本日はありがとうございます。



▲横山校長、理科担当の大和先生、授業の合間に駆けつけた3年生の生徒たちと共に

■気仙沼市立小原木中学校■昭和22年4月開校。全校生徒39名、教職員18名。校庭の地割れ、校舎や体育館の破損等あったが、その半分は修繕を終えている。学区の人口は1612、563世帯（平成23年度現在）

第2部 ●被災地・気仙沼を歩いて

世界屈指の三陸沖漁場を有する気仙沼。震災から1年経ち、かつて賑わっていた漁業町には、骨組みだけの建物が点在し、行き場のない瓦礫が山積みのまま…。その被害の凄まじさを物語っていました。そんな中でも、復興のきざしを各所で垣間見ることもできました。我々「WA!」編集部が気仙沼で見たこと、感じたことをここに記します。

「漁業町・気仙沼の今」

海に開かれた気仙沼の歴史は、漁業とともに歩んできました。中心地の鹿折唐桑（ししおりからくわ）駅周辺には、屋根の反りが美しい赤・黒瓦の唐桑御殿が、ほんの1年前まで町の至る所で見られました。昔からこの地区には、マグロなど遠洋漁業の船員が多く住み、次の航海までの数カ月、体をいたわり家族との団らんを楽しむために、豪壮な家を競



▲町中には瓦礫の山が。うすたかく積まれた廃車にはすべて番号が付けられ管理されている



▲震災当時の津波の凄まじさを語る第十八共徳丸



▲飲食店の賑わいを取り戻そうと、昨年11月にオープンした「復興屋台村 気仙沼横丁」。現在19店が営業し、皆が元気になる場所に!とさまざまなイベントも企画

うように建てました。しかし、この大津波で駅は倒壊し解体、御殿の面影すら見ることはできませんでした。人っ子ひとりいない瓦礫の町を歩いていると、土台だけの家々、焼け焦げた車の山から、突如、大型漁船・第十八共徳丸が出現。あの日、気仙沼湾に係留していた17隻の漁船は、



▲魚市場では明るい笑顔に出会うことができた。マグロを解体する夫婦は息もピッタリ!

800m離れた市街地まで流されてきました。この第十八共徳丸以外はすべて撤去されましたが、復興モニメントとして残したい行政側と、津波で家族や家を失った住民たちとの意見が合わず、どのようにするかはまだ結論が出ていないそうです。気仙沼駅から車で10分ほど走ると、「港まち恋人スクエア」と名付けられた観光地エリアから魚市場へ。観光物産センターや桟橋、遠洋漁業の船員たちが通った銭湯や飲食店などが軒を連ねていたそうですが、その風景は一変。地盤沈下がひどく、1mほど盛り土された道も舗装されておらず、瓦礫撤去の大型ダンプが通るたびに砂埃が舞い上がっています。そんな中、魚市場を歩いているとマグロを解体しているご夫婦を発見!「市場が休みだけど、昨日揚がったマグロを頼まれちゃったんで」と明るい笑顔。今年の養殖のカキやワカメは、例年の倍のスピードで生育し、間もなく出荷というニュースも聞くことができました。

さらに気仙沼湾沿いを車で南下し、陸中海岸国立公園にある岩井崎へ到着。秀ノ山雷五郎像は、岬の荒波に立ち向かうようにありました。郷土が誇る第9代横綱は、あの大津波にも「残った!残った!」と地元の人たちの心の支えになっています。波打ち際には、龍の形をした松が一本、健気に立っています。今年の干支・辰にちなんで、地元の昇り龍となるべく、「龍の松」と名付けられ、雷五郎像とともに被災地の新たな観光スポットとして期待されています。この震災で、死者・行方不明者を合わせて1400名以上が犠牲になり、住宅建物（全壊・半壊含む）は1万5650戸が被害に遭った気仙沼。しかし、この町の歴史を振り返ると、大正4年、昭和4年の大火、明治三陸大津波（1896年）、昭和三陸大津波（1933年）、チリ地震津波（1960年）と、たび重なる大惨事にも、地道に力強く立ち上がってきた。

「何度も立ち上がってきた」



▲ユーモラスなタコちゃんを手に。偶然にも、仮設住宅を訪れたマルティナさん(右)に出会えた

昨年7月、「小原木タコちゃん」は誕生しました。足がなくなってもまた生えてくるタコに由来し、復興シンボルとして仮設住宅で生活を送る女性たちの手で作られています。震災直後から交流が続く、京都で編み物教室を主宰する梅村マルティナさんが、毛糸を提供し、だれでも作れる人形の手ほどきを。「手を動かしていると、気持ちが休まる」という仮設住宅で作業する女性の声。別れ際、「大切に作られたタコちゃんを家族の一員としてかわいがってください」という言葉が添えられました。サイズにかかわらず1体1000円。購入は小原木中学校内仮設住宅のほか京都でも。詳細は、タコちゃんブログでご確認を。

http://d.hatena.ne.jp/koharagi_takochan/

気仙沼の復興シンボル 小原木タコちゃんを家族に!



▲間近で見ると「龍の松」は思いのほか、か細い。よくぞ大津波に耐えた!とたたえたい



▲地元の人たちに勇気と希望を与えているという秀ノ山雷五郎像。今日も岬から気仙沼を見守る

ました。今回、町で見かけた復興のきざしから、少しずつ町に活気が戻ることを願いつつ、我々は気仙沼を後にしました。